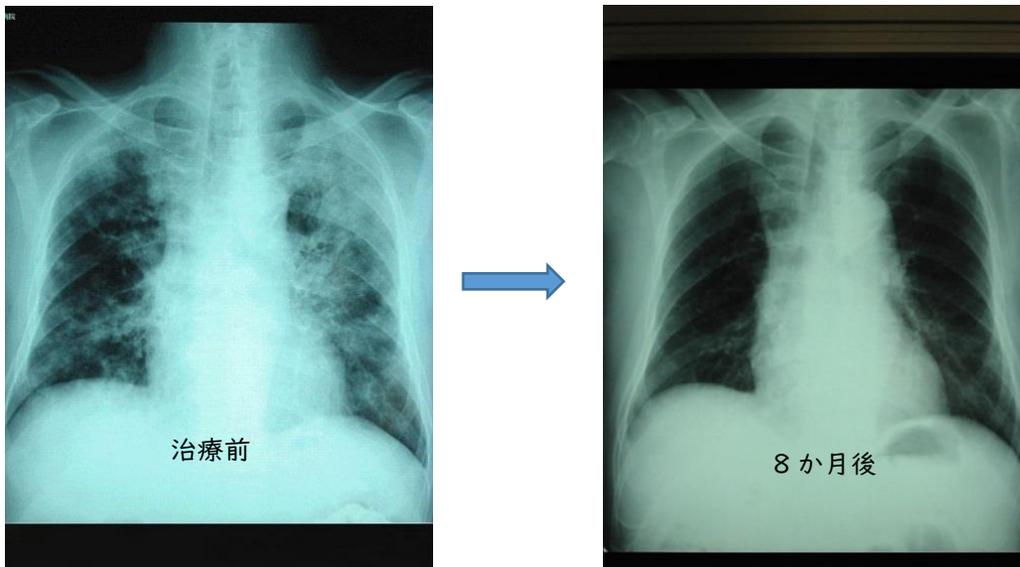


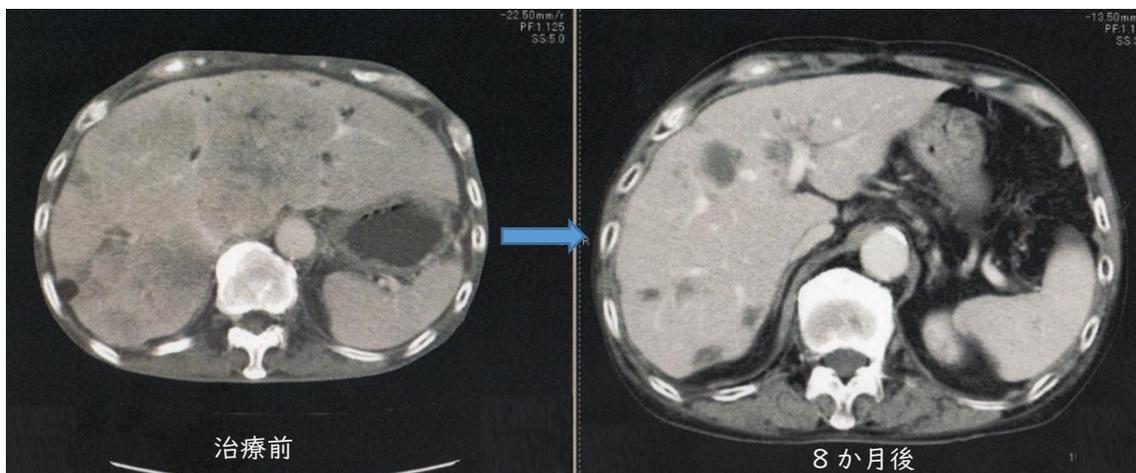
緩和的化学療法とは

副作用を極力出ないように工夫し、抗がん剤の投与量を推奨量の1/2~1/4などに減量して投与し、がんによる苦痛（疼痛・食欲不振、呼吸苦など）を少しでも軽減する治療。
患者さんが希望されれば、推奨量まで徐々に増やしてゆくことも可能。必要に応じて、放射線治療も併用できます（他院の協力を戴きます）。

<症例1> 進行胃癌の肺への転移によるがん性リンパ管症（72歳男性）
推奨量の半量のシスプラチンと5FUを間欠投与。

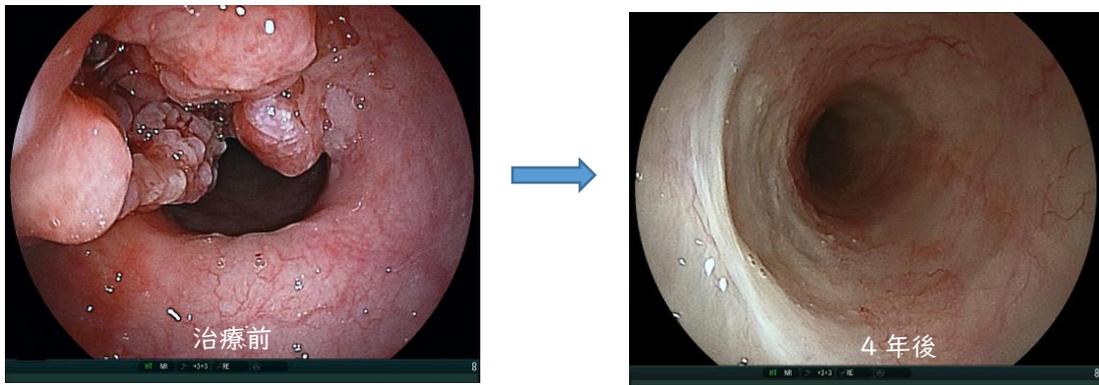


<症例2> 進行胃癌の多発肝転移（75歳男性）
推奨量の1/3量のシスプラチン、ドセタキセル、5FUを間欠投与。



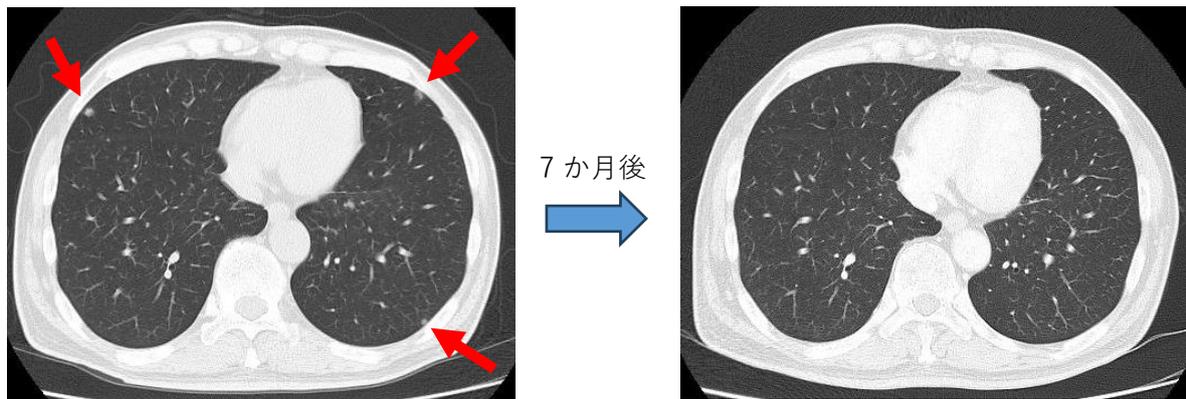
<症例3> 進行食道がん（74歳男性）

他院協力での放射線治療 60Gy+推奨量の1/3量のドセタキセル+5FU投与



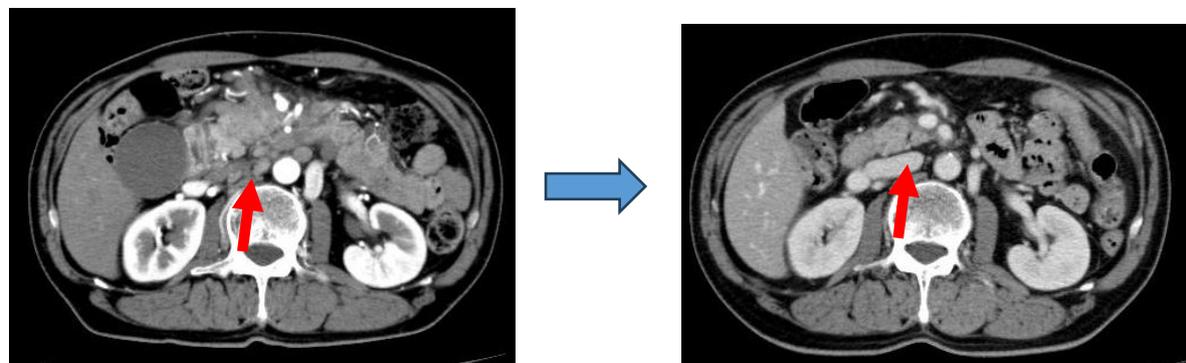
<症例4> 肺肝多発転移を伴う切除不能膵癌（62歳男性）

約60%量の抗がん剤を投与。2回投与したところで、背部痛は消失、食欲回復、体重も健康時に戻り、腫瘍マーカーは正常化しました。



多発肺転移

転移消失



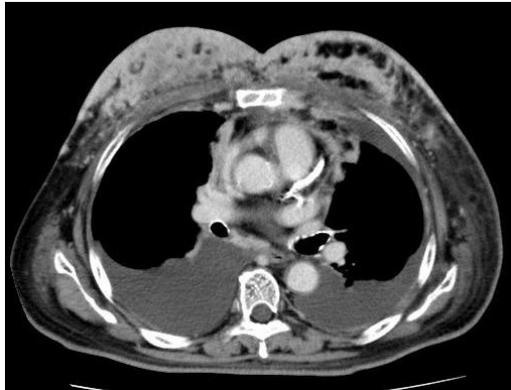
膵頭部に6cm大の腫瘍あり、血管の閉塞あり

主腫瘍の消失。つぶれていた主要血管の開通

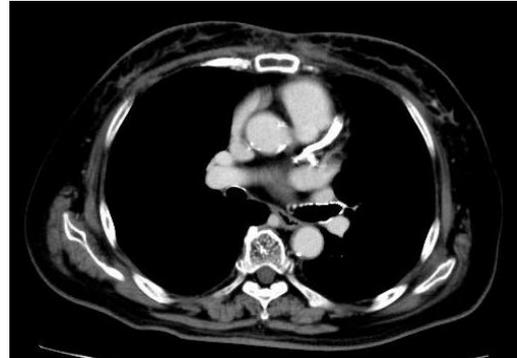
<症例 5 > 切除不能乳がん（70 歳女性）

癌性心外膜炎、癌性胸水のため救急来院。約 50%量の抗がん剤を投与。

1 カ月で症状消失。徒歩で退院された。



3 年後



※ 注：すべての方に、上記同等の効果が得られるわけではありません。